

メキシコ農業の国際化

吾 郷 健 二
(西南学院大学)

1960年代後半以来、メキシコ農業は危機に瀕していると言われる。

- i) 食糧自給の崩壊と基礎食糧の大量輸入
- ii) 農産物貿易の黒字激減と場合によっては赤字転落
- iii) 栄養水準の危機
- iv) 大量の人口流出とその雇用問題、等々。

危機の原因についても様々な指摘がある。例えば、農工価格関係、政府介入と政策のまずさ、農業フロンティアの消滅、「緑の革命」技術の停滞と普及の行き詰まり、農地改革のストップ、輸出志向農業の再興と新国際分業、等々。

筆者は、これらはすべて確かに危機の一要因を説明してはいるが、メキシコ農業危機の本質的な説明とは言い難い、と思う。世界システム論的（筆者自身の用語で言えば、〈近代工業文明の世界システム〉論の）枠組みの中で説明することが、大事ではないか。

メキシコ農業の戦後の展開を、工業化と都市化を軸にした1940年代以来のメキシコの近代化＝経済発展過程の全体的な枠組みの中に位置づけ、その中で農業に割り当てられた役割を農業が見事に演じることによって、農業の危機がもたらされたこと、その特徴は資本制生産様式の拡張（非資本制領域への浸透と先進国資本の活動領域の新展開）であること、その手段は、農業の工業的変革を核とするアグリビジネス的垂直統合であること、以上の結果として、メキシコにおける食生活＝食文化に変革が起こりつつあり、同時に農業危機が招来されたこと、これらのことを筆者は、端的に、メキシコ農業危機の根本原因としての〈農業の国際化〉概念に集約して、明らかにしたいと考える。

（本報告について詳しくは、拙稿『メキシコ農業の国際化』西南学院大学経済学論集 21巻3号、1986年12月を参照されたい。）